令和８年度　第１回伊勢崎市総合教育会議　議事録

会議の名称	令和８年度　第１回伊勢崎市総合教育会議
開催日時	令和８年６月３０日（火）午後２時００分～午後３時１８分
開催場所	伊勢崎市役所　本館５階職員研修室
出席者氏名	【委員】 臂泰雄市長、三好賢治教育長 野口理英子教育委員、矢島祐介教育委員、佐塚公代教育委員、稲葉友昭教育委員 【説明員】 下城副市長、藤原副市長 （市長戦略部）倉上市長戦略部長、細野市長戦略部副部長兼戦略推進課長 （教育部）　二上教育部長、髙橋教育部副部長、大平総務課長 小此木教育施設課長、神立学校教育課長 杉原四ツ葉学園中等教育学校事務長、坂本学務課長 百瀬健康給食課長、関根生涯学習課長、町田図書館課長 出浦文化財保護課長 【事務局】 （市長戦略部）栗原戦略推進課課長補佐、竹澤戦略係長、奥野主査、太田主査 （教育部）阿左美総務係長、青木総務係長
傍聴人数	２人
会議の議題	報告事項 ⑴　伊勢崎市立学校の教育職員に関する業務量管理・健康確保措置実施計画について 協議事項 ⑵　群馬県立高校の在り方検討を踏まえた“いせさき教育”の在り方に関する意見交換について
会議における議事の経過及び発言の要旨	**１　開会［市長戦略部長］** ただいまから、令和８年度第１回伊勢崎市総合教育会議を開催いたします。 **２　市長あいさつ** 皆さんこんにちは。本日は、大変お忙しい中、お集まりいただきまして大変ありがとうございます。 今朝、市内にある幼保連携型幼稚園の園舎が新しくできたということで、竣工祝いに行ってまいりました。その挨拶の中で、幼稚園や保育園から義務教育につなげるということ、さらに、義務教育から高等教育につなげていくという部分をしっかり行政として行っていかなければ、こどもまんなかの社会は実現できないのではないかという話をしてまいりました。 三好教育長を始め、教育委員の皆さんには、実際の義務教育の部分を中心に見ていただいておりますけれども、やはりその前後をしっかりカバーしながら、生涯学習までつなげていくというところを行政としても共に行っていかなければならないと思っております。 教育委員の皆さんには、様々な立場からのお話をいただきながら、今日の

	総合教育会議を充実した実りあるものにしたいと思いますので、よろしくお願いいたします。 **３　教育長あいさつ** 　臂市長には、日頃より伊勢崎の子どもたちの、現在、そして未来を考えていただくとともに、教育行政に大変なご理解ご協力、さらには、財政面のみならず人員の配置等々、教育条件の整備拡充にお力をいただいておりますことを心より感謝申し上げます。 　また、おかげさまで、教育委員会と市長部局、子どもに関わる関係部局の連携が進み、一体となって子どもたちの未来を考える機会をいただいておりますことを本当にありがたく思っております。 　先ほど、おっしゃっていただきましたとおり、幼児教育と義務教育、その上の高等教育をどうつなげていくかということについては、教育に関わるものだけでなく、私立の幼稚園、こども園、保育園等々の関係者が一体となって取り組まなければならないことであります。 　そうしたことからも、今日このような総合教育会議という場で、伊勢崎市全体の状況を考えていく上での一つのきっかけを作っていただきますことに、大変ありがたく思っております。 　本日はどうぞよろしくお願いいたします。 **４　署名委員の指名［市長］** 　まず、委員の皆様の出欠状況でございますが、本日は、全委員の皆様にご出席をいただいております。 　それでは、次第に従いまして会議を進めさせていただきます。 　まず、次第４「署名委員の指名」についてですが、議事録作成の際に、議長及び委員１人に、その内容を確認いただいたことへの署名をいただくこととなっております。今回の議事録へのご署名は、三好教育長にお願いしたいと思います。 **５　報告事項** 　伊勢崎市立学校の教育職員に関する業務量管理・健康確保措置実施計画について **（市長）** 　次に、次第５「協議事項」に入ります。 　（１）伊勢崎市立学校の教育職員に関する業務量管理・健康確保措置実施計画について、学校教育課長、説明をお願いします。 **（学校教育課長）** 　令和８年３月教育委員会会議において議決されました、伊勢崎市立学校の教育職員に関する業務量管理・健康確保措置実施計画について、報告いたします。 　業務量管理・健康確保措置実施計画とは、公立学校の教職員の長時間勤務を是正し、心身の健康を確保するために、教育委員会が策定する具体的な実施計画のことです。令和７年６月の「公立の義務教育諸学校等の教育職員の給与等に関する特別措置法」改正により、市教育委員会に対してこの計画の策定・公表が義務化されました。 　本計画の主な目的は３点あります。１点目は、教職員の在校等時間を適切に管理し、長時間勤務を抑制する「働き方改革の改善」、２点目は、教職員が心身ともに健康で、専門性を最大限に発揮できる環境を整えることで、子どもたちへの教育を充実させる「教育の質の向上」、３点目は、働きやすさと働きがいを両立させ、教職の魅力を高める「やりがいの確保」です。 　計画に盛り込まれる主な内容は、時間外在校等時間の目標値、業務の３分

	類「学校以外が担うべき業務」、「教師以外が積極的に参画すべき業務」、「教師の業務だが負担軽減すべき業務」を踏まえた教育委員会による業務の見直し、健康管理の徹底、ストレスチェックの実施や、産業医等による面接指導の強化、休憩時間の確実な付与や年次有給休暇の取得促進などを項目に盛り込んでおります。 　本計画の運用につきまして、毎年度、実施状況を検証・公表するなど進捗管理を行い、ホームページ等で広く公表いたします。この計画は、単なる「努力目標」ではなく、法的な枠組みの中で地域や保護者の理解も得ながら、学校全体の働き方を根本から見直すための実行計画としての役割を担っているものです。教職員の働きがいを一層向上させ、教育の質の維持・向上を図り、伊勢崎市の未来を担う子どもたちの健やかな成長を担保できるように、本計画を実行してまいります。 **（市長）** 　ありがとうございました。ただいまの説明について、ご意見・ご質問等はございますか。 【意見等、特になし】 **（市長）** 　この取組を実効性のあるものにしていくためには、様々な団体との関わりが必要になると思いますので、検証等の際には連携していただければと思います。 　それでは、特にご意見・ご質問がないようですので、次に進みます。 **６　協議事項** 　群馬県立高校の在り方検討を踏まえた“いせさき教育”の在り方に関する意見交換について **（市長）** 　次に、次第６「協議事項」に入ります。 　本日は、群馬県立高校の在り方検討を踏まえた“いせさき教育”の在り方について、をテーマとした意見交換を行います。 　なお、この後の進行につきましては、三好教育長にお願いいたします。 **（教育長）** 　それでは、意見交換の進行役を務めさせていただきます。 　まずは、テーマであります、群馬県立高校の在り方検討を踏まえた“いせさき教育”の在り方について、まずは市長からお考えをお聞かせいただいた後、委員の皆さんから順次、ご意見をいただきたいと思います。 　それでは、市長、お願いいたします。 （市長） 　今回は、私の方で委員の皆さんと意見交換をしたいということで、このテーマとさせていただきました。 　市政運営を行う上で、様々な地元の皆様からお話をいただいております。その一つとして、伊勢崎市は現在、中学３年生の１学年で約１，７００人の生徒がいる状況の中で、市内の県立高校及び四ツ葉学園中等教育学校の定員の合計が１，２００人程度であり、自動的に５００人程度の生徒は市外の高校に進学しなければならないという状況にあるということであります。これは、近年だけではなく、以前から地元の中学生が地元の高校に行けないという状況をどう捉えているのかということで、市民の皆さんから、私が市議、県議の時代にもお話をいただいておりました。

	このような状況の中で、今、群馬県が県立高校の在り方を検討するという動きがあります。これは単に統廃合するだけということではなくて、県内すべての地域で在り方を検討するということですので、この時期に、この伊勢崎市の義務教育から高等教育への現状を、一つの課題として考えていくということが大事なのではないかと考えています。 また、地元の企業の皆さんからは、人材不足の中で、地元の高校生に就職してもらえないという課題があると聞いております。地元の子どもたちが、地元の企業に就職してくれないという点では、確かに地元の子どもたちが市外に出て、市外から市内に戻ってきてくれるというところの繋がりの部分が課題としてあります。また、地元にある学校と地元企業の繋がり方についても、地元の企業が、例えば前橋工業高校、桐生工業高校など、近隣の工業高校に就職のお願いに行ってもなかなか地元として扱っていただけないということもあると思います。そもそも地元の高校に通う人がいないということと、市外の高校にお願いに行ってもなかなか地元としての扱いをしていただけないという部分を何とか改善したいということで、話をいただいているところであります。 実業高校に進学してもその後、専門学校、大学に進学する学生が多いということも一つの大きな要因ではあると思いますが、伊勢崎で育つ子どもたちに対して小学校や中学校時代に、地元企業について様々な繋がりを持っていただくことが大事だと思います。そのような中、この県立高校の在り方というところを検討しながら、この伊勢崎市の教育を今後どのように考えていくかということを、皆さんと話し合いができればと思います。 もう一つ、これは高校の話だけではありませんが、伊勢崎市の場合には、外国籍の方が大勢住まわれており、外国籍の子どもたちも大勢います。これらの方々に、これからの教育を受けてもらえる関係を作っていくということもしっかり取り組んでいく必要があると思います。 また、多様な学びの場を用意するということも大変重要なことではないかと思いますので、これからの伊勢崎市で育つ子どもたちに対する“いせさき教育”ということを、皆さんと意見交換できればと思います。ぜひ忌憚のないご意見をいただければと思いますので、よろしくお願いいたします。 **（教育長）** 今、市長からのお考えをいただきましたが、課題提起いただいた内容に沿いながらもプラスアルファとして、皆さんの意見をいただければと思います。 それでは始めに野口委員さんお願いしします。 **（野口委員）** 現在、県立高校が抱えている課題を３つ挙げたいと思います。 １つ目は少子化です。高校生の数の減少に伴い、学校規模の維持や教育資源の確保が課題となっていると思います。 ２つ目は若者世代の人口流出です。進学や就職を機に都市部へ移ってそのまま地元を離れる若者は少なくないと思います。 ３つ目は社会変化への対応です。ＡＩをはじめとするデジタル技術の急速な発展に加え、外国にルーツを持つ生徒の増加や不登校経験のある生徒、発達特性のある生徒など、高校にはこれまで以上に多様な背景を持つ生徒が集まってきています。私はこうした課題への対応を踏まえ、県立高校に求められる教育として、繋ぐ力を育てる教育を提案したいと思います。地域社会では、単一の知識や理論では解決できない課題が非常に増えてきていると思います。だからこそ、高校教育には、知識や技能を身に付けるだけではなく、異なる立場や価値を理解し、人と人、人と地域、地域と社会を結びつける力を育む視点がこれまで以上に求められているように思います。 まず、若者世代の人口流出についてですが、若い人が一度地元を離れて、

	都市あるいは海外で学んで、見聞を広げるということ自体は決して悪いことではないと思っています。様々な経験を積むことで、地元を客観的に見る視点や新しい価値を地元へ持ち帰る力が育まれるのではないかと思っております。私自身も高校を卒業してから色々な県を転々とし、群馬へ戻ってまいりました。地元を出たからこそ、群馬の自然環境や人との繋がり、暮らしやすさ、そういった地元の魅力というのを改めて実感しているところです。 　また近年、群馬県は都市部からの移住先として注目されています。地方から都市、都市から地方へと行き来する時代だと思うところですが、そのような中、伊勢崎市と都市、伊勢崎市と世界を結ぶ橋渡し役となるような人材が求められるのではないかと思います。高校教育は、地元に残る人材を育てるということだけではなくて、地元、伊勢崎市を自分の言葉で語れる人材を育てるという視点も大切ではないかと思います。地域の歴史や企業について、高校生のうちに学んで、その魅力を国内外に発信する。都市部の大学や企業、海外との交流を経験することで、高校生たちが地元を客観的に見つめ、自分たちの言葉で伊勢崎の価値について伝える力を育んでいけるのではないかと思います。 　次に、社会変化への対応についてです。ＡＩをはじめとするデジタル技術が急速に発展する中、ＡＩやＩＣＴを適切に活用する知識や技能はこれからますます必要になってくると思います。一方で、ＡＩが示した情報をそのまま受け入れるのではなくて、自分で考えて判断し、倫理観、道徳観を持って活用するということも同じぐらい大切だと思います。こうした能力は教室で知識を学ぶだけで身に付くものではなく、多様な人との関わりの中で育まれるのではないかと考えております。先ほど市長もおっしゃったように、伊勢崎市には外国にルーツを持つ方が多く暮らしています。多文化共生を身近に学べる環境がここにあると思います。また、不登校経験のある生徒や発達特性のある生徒など、多様な学びのニーズもあります。こうした特徴を課題として捉えるだけではなくて、学びの資源として生かし、多様な生徒同士が互いの得意なことを認め合いながら学び合える環境を作ることが今の時代、求められる力を育てることにも繋がるのではないかと考えています。 　こうした教育を実現していくための一つの高校の在り方を提案したいと思います。例えば、一つの高校の中に、進学コース、外国にルーツを持つ生徒も学びやすいグローバルコース、不登校経験や発達特性のある生徒が自分の得意なことを伸ばしながら学べるコース、そういった複数の特色のある学びの場を一つの学校に設けるというものです。さらに、それぞれのコースに通う生徒たちが交流できる仕組み、カリキュラムを作っていくということを提案したいと思います。一つの高校という箱の中で、多様な背景や目標を持つ生徒が日常的に交流して、お互いの良いところ、強みを生かしながら、学び合える環境を作るということです。そうした学校であれば、多様な価値観に触れながら、判断力や倫理観を育み、人と協働する力を自然に身に付けることができるのではないかと思います。そして、その経験は、地域と都市、伊勢崎と世界を結ぶ人材の育成にも繋がっていくのではないかと思います。人口減少や多様化は、地方にとって大きな課題だと認識しておりますが、それらは教育資源にもなると思っています。県立高校は、生徒を地域に留める場所ではなくて、様々な場所、人を繋ぐ人材を育てる場所であって欲しいと思っております。そして、高校生たちには、そのあと、地元を離れても、地元に戻ってきても、自分の地元である伊勢崎市の素敵なところをたくさん語れる人になって欲しいと思っています。 **（教育長）** 　ありがとうございました。具体的にこんな高校をという構想までお話をいただきました。市長いかがでしょうか。 **（市長）**

	確かに地元の高校が子どもたちを縛ってしまうというところまでやる必要はないと思っています。ここで学んで、郷土愛という言い方がいいのかわかりませんけれども、そういった形で育てていただくのが一番良いと思います。先ほど企業の話をしましたけど、伊勢崎市にも世界に羽ばたいている企業があります。そうした企業が若手の人材を技術者として必要としている状況があるにも関わらず、子どもたちがそのことを知らない。そういったある意味、宝物のようなものを見ずに過ごしてしまって、市外に出ていってしまうのは本当にもったいないと思っています。また、そのような世界で戦っている企業は、大学を卒業してから就職を考えると、逆にハードルが高くなる場合があります。それは、大学を卒業して学力をつけた人材以外に、独自の技術、技能をできるだけ早い段階で学びながら、それを伸ばしていくような若手の技術者、技能者を本当に望んでいるという状況があるということです。このようなことを知った上で、子どもたちが大学を出たいという意思であれば良いのですが、知らないまま、出て行ってしまうことがあります。やはり地元にこのような宝物であり、本人がこれから力を伸ばせるところがあるということを、先ほど野口委員は地元を語れると言っていましたが、語れるぐらい地元のことをしっかり知ってもらうということが必要だと思います。企業の話だけではなくて、様々な環境を含めて地元にこういった歴史がある、文化があるということを、まずは義務教育の段階で持ってもらうということが必要だと思います。 外国籍の子どもたちが多いということも、一つの資源として考えられます。これは以前もお話ししたかもしれませんけど、総合計画を策定する際に中学生に対して伊勢崎市の特徴を尋ねたら、「外国籍の子どもたちと一緒に学べる」ということを一つのメリットとして取り上げてもらいました。そのメリットを生かすために何が必要かという問いに対しては、「ここに住んでいる市民の皆さんが外国籍の方たちのことを理解するということが課題だ」と言っていました。今、伊勢崎市で学ぶ小学生、中学生は、外国籍の子どもたちとの付き合い方や関係性を本当によく考えていると思いました。このように捉えている子どもたちの思いをしっかり実現していくことも、大切だと思っているところです。 冒頭に話した幼稚園の先生からは、外国籍の子どもが増えていて、言葉の問題にとても困っているという話をされました。伊勢崎市としても、そういったところに少しでもお手伝いをしたいという話をしたのですが、それ以上に日常会話だけではなく、内容をきちんと理解してもらうというところまでのしっかりした教育を外国籍の子どもたちに対して行っていかなければならないと思います。外国籍の方が多いことは一つの大きな資源ですけれども、本当に資源として生かすためのことをやっていかなければと思います。これは教育委員会だけではできないことですので、市長部局も加わって、横断的に取り組まなければならないと思います。野口委員のお話は、私もよく理解しながら、市でできることを考えていきたいと思います。 **（教育長）** ありがとうございました。高校の在り方、それに伴う義務教育の在り方についてお話をいただきました。 次に矢島委員さんよろしくお願いします。 **（矢島委員）** いせさき教育の在り方について市長がおっしゃっておりましたが、私は伊勢崎の魅力を学ぶ、伊勢崎をよく知るというそういう視点で意見を述べたいと思います。 私は伊勢崎東高校の出身で、１１期生です。当時の先生たちは、東高校ができた経緯を授業の合間によく話してくれました。「佐波伊勢崎地区には、男子普通科の高校がなく、普通科で学ぶには、市外に出るしかなかった。東

	高校は、地域から望まれてできた学校だ。だから君たちは・・・」という話で、聞いている私は矜持を感じました。東高校は、その先生たちの母校ではありませんでしたが、大切なことのように話してくれました。 さて、本題に入りたいと思います。伊勢崎で学んだ子どもは「何で」と口にする子が多い、こういう声が聞かれるような教育を伊勢崎市が丸ごとパイロットエリアになって展開するという提案です。「何で」とは不満の吐き捨てではなくて、問い立ての「何で」ということです。疑問を持つ、問いを立てるとは、技術職や開発系からエッセンシャルワーカーまで前向きに働く人には大切なセンスです。 学校の中では、総合的な探究の時間を通じて、問いを立てて、調査分析し、行動して検証するという資質能力を身に付けることが求められています。 しかし、学年が進むにつれて、指導する先生も学ぶ生徒もその効果があったと感じる割合が少なくなることが課題になっています。これは２０２３年の文部科学省の発表です。社会に出る年齢に近い高校生に課題解決学習の能力が思うように育っていないという現実があります。伊勢崎市内の県立高校は、どこに進学しても、高校の専門性を生かした探究の時間が学べる学校区、エリアが作られているとしたら、それは伊勢崎市の産業発展、社会的な課題解決、共生社会の実現、持続可能な社会の実現にも有効に働くのではないと思います。伊勢崎市には、その探究学習にプラスに働く素材がたくさんあります。農業は、県内２位、１１８億円を稼いでおり、特に野菜づくりに強みがあります。工業は、県内２位、１兆２，０００億円を稼いでいます。商業は県内４位、２，２００億円と、産業で発展を遂げているのが伊勢崎市です。この先、伊勢崎市の産業をどう伸ばすのか、高校生たちはどう考えるのでしょうか。人口密度は市の中で１位、１４歳以下の人口が多く、働き手も多い、外国籍の住民も多い。多様な人たちが一緒に幸せに暮らすには、どのようなまちが望まれるのでしょうか。一方で、生物多様性は低い。森林面積は極端に低く、自然と呼ばれるものがあるのか。伊勢崎市では、人と自然との関係を将来どう考えていくのがよいか。伊勢崎市のマンパワー、人のネットワークも、探究学習の強力な力になるはずです。つまりこのようなマンパワーを活用し、教育に参加してもらうということです。 現在の発展は、今の県立高校、伊勢崎工業高校、伊勢崎興陽高校、伊勢崎商業高校、伊勢崎清明高校、伊勢崎高校や統合した以前の高校の卒業生達のマンパワーやネットワークの基盤の上に成り立っています。また、伊勢崎市に古くからある会社や進出してきた新しい会社、世界に羽ばたいている企業の技術力や経営方針も探究学習に導入できる素材ではないでしょうか。伊勢崎市内にあるすべての県立高校は、伊勢崎全体で探究する力を育成する。生徒は、探究学習の成果だけではなく、問いを立て、例えば合同文化祭や市内総合文化祭を通して、住民、企業、社会、行政に向けて発信をする。将来のビジョンをみんなで考える機会を伊勢崎市内の高校と地域が協働して作るという意見です。最後に要望として、伊勢崎市に深い思い入れのある先生の着任と、指導の継続をお願いしたいと思います。 **（教育長）** ありがとうございました。探究学習を核にして、市内全域を一つにした構想のお話でした。市長、いかがでしょうか。 **（市長）** 先ほど野口委員からＡＩの話がありましたけど、これからますますＡＩが発展したときに人はどうするのかというと、まさしく矢島委員が言われたとおり、探究というところをしっかりやっていかなければならないと思います。そのような形でなければ、やはりこれからますます困難な時代になる中で、生きていくことが難しくなるのではないかと思います。何か問いをかけ

	ても、ＡＩが答えてくれる環境の中で育ってしまう。本当にどうなってしまうのだろうと心配ですけど、間違っても良いから自分で考え、物を作って、失敗をしてというような行動の繰り返しを子どもたちができるようになることが、これからの生きる力につながっていくのだと思います。その中で、伊勢崎の持っている歴史や文化をしっかり伝えながら、地域を学んでもらうことが、大きな学びの場、経験できる場になるのだと思います。 先ほど自然環境のお話がありましたが、このような困難な場所であるからこそできること、やらなければいけないことを考えてもらうということが必要になってくるのだと思います。伊勢崎市で指導していく先生は、その辺をしっかり理解していただいていると思いますけど、新任で着任した先生にも伝えていくことが必要なのではないかと思います。 今、お話を聞く中で、本当に伊勢崎市はいい街ということを改めて感じました。ここで育つ子どもたちにも、しっかり育って欲しいと思います。 **（教育長）** ありがとうございました。これまでも、義務教育はもちろん、高校でもこの地域の社会資源を教育資源として、色々と活用させていただいてきました。また、そのために様々な企業、団体等から教育支援の提供をいただきました。それを今度は子どもたちが、社会課題を自分事として、しっかりと捉えて、自分で動き出せるような子どもたちを育てる。そういった高校を作るというような構想と伺いました。 次に佐塚委員さんよろしくお願いします。 **（佐塚委員）** 市長からいくつか課題が出されましたので、その中から３つに絞って考えを述べさせていただきたいと思います。 まず１つ目は、地元に学ぶ、地域との繋がりを持ちながら成長できる教育環境の確保が必要であるというお話です。 高校生も自分の生き方を模索しながら進路決定をしていくということは、大変なことだと思います。やはり親や先生、それ以外の大人との関わりの中で一緒に考えていくことが必要ではないかと思います。そういう関わり方というのは幼児教育や義務教育のときから始める必要があると思います。幸いにも伊勢崎市には学府制があることは皆さん御存じだと思いますが、１８のコミュニティスクールがあり、義務教育と公民館がコーディネーターとしての役割を担って活動しております。こういった基盤がありますので、ぜひ地元の高校でも、外部人材に加えて、商店や企業あるいは団体、この団体の中には、伝統芸能などの団体などもイメージしているのですが、そういった外部の方たちを交えたコミュニティハイスクールのようなものを進めてはどうかと思います。 地元を語れるというお話が野口委員からありましたけど、そういった考えに通じてくると思います。まず、パイロット校から始めて、高校の特色を生かして地域の企業や団体と繋がっていけるようになったら良いと思います。私の中では、興陽高校などが１歩踏み出していると思いますので、市もぜひ応援していただけたらと思います。 次に２つ目ですが、地元高校から地元企業への就職促進について、市長からもお話がありましたけど、伊勢崎市には、市内に住んでいる生徒や学生に奨学金の貸与と入学時に給付金が交付されるという制度があります。毎年、高校生や大学生がそれを利用しているわけですが、中には、日本学生支援機構などとも併用しており、卒業後、すぐに返済が始まるわけですけど、結構な金額を返済するという人たちも出ているようです。そこで、企業に就職した人に対して、企業が奨学金を肩代わりする奨学金代理返還制度があるということをお聞きしているのですが、伊勢崎市でも地元企業との間でこの制度を検討していただけたら良いのではないかと思っております。

	最後に３つ目です。県立高校の在り方や再編に関する検討と本市の将来ビジョンというところなのですが、結論から言ってしまいますと、統廃合とか再編併合はやはり慎重に行うべきだと思います。学校の存続というのはやはり地域の存続という部分にも関わってくると思います。私自身の経験から言いますと、境女子高校のことが頭にありまして、１００年の歴史があったところで閉校してしまったというのが、非常に残念だという思いがありましたので、統廃合、再編併合というのは、本当に慎重に考える必要があると思います。 伊勢崎市は地理的な条件とか鉄道などがあって非常に好条件だと思いますので、受験生にとっては、高校の選択肢が非常に多いです。高崎市、前橋市、桐生市、太田市まで選択肢があるというのは中学生、受験生にとってはうれしいことではないかと思います。また、先ほど市長の話もありましたけど、伊勢崎市には私立高校がありませんが、令和７年度には３００人近くが私立高校へ進学したと言われています。これは授業料無償化などが今年度から始まりましたから、その影響もあるかもしれませんけれども、公立高校と私立高校は、教員の採用の仕方や設備投資、財源確保など、本当にすごく違っています。特に受験生にとっては、入試方法が私立高校の大きな魅力になっているのではないかと考えます。公立高校は５教科ですが、私立高校は入試科目が３科目以下というところも多く、併願ができるというところも受験者にとっては魅力的でありがたいことだと思います。そこで、県立高校においても再編を検討する前に、県立高校間の授業連携や入試方法の検討を行うと良いのではないかと考えます。県立高校間での授業連携、あるいは複願、くくり入試と言ったらいいのかわかりませんけど、伊勢崎工業高校と伊勢崎商業高校で授業連携や、複願、くくり入試を例に取って考えたときにこんなこともできるかなということで、１つ最後に提案したいと思います。 伊勢崎工業高校は、地域の産業と一緒に歩み続けてきた県内でも最初に創立された非常に伝統ある工業高校です。今でも電気科では、風力発電の実験などがあって、ＳＤＧｓの推進都市である伊勢崎市とも伴走ができそうですし、また伊勢崎商業高校も企業と次世代防災システム開発プロジェクトなどを結んでおります。この２校は、資格試験の合格を目指す教育課程を整備していて、その合格率も非常に高いです。これからの時代は、資格や技術を身に付けるということは一番重要になってくるのではないかと思います。もし、この２校が企業や市などのプロジェクトに参加できるような授業を持って、授業連携が可能になれば、潜在的な興味や自己発見に出会う機会となって、商業か工業かに固定されない職業選択にも繋がるのではないかと思います。また、希望する受験生には、伊勢崎工業高校と伊勢崎商業高校を複願、くくり入試できるようなことが適用されると良いと考えます。２校を例に挙げましたけど、少子化が急速に進む中で、他の市内外の高校間での複願、くくり入試も考えることができれば、定員割れへの対処や２次募集による再試験も避けることができるのではないかと考えます。 **（教育長）** ありがとうございました。コミュニティハイスクールや奨学金、地元企業と連携した制度。さらには、工業高校、商業高校など、これまでの既存の枠組みを超えた、新たな方向の仕組みということで、大変面白いご提案いただきました。市長、いかがでしょうか。 **（市長）** 先ほど境女子高校の話がありましたが、やはり学校を統廃合するということは、高校だけではなく、小中学校も含めて、色々なことを考え、本当に慎重に行う必要があると思います。また、統廃合の前にやるべきことをやっていくことも必要だと思います。今、お話の中で、ある意味、自由度が高まるような、くくり入試という提案をいただきましたので、県立高校の在り方を

	検討していただく中では、このような様々な取り組みを市としても、県にお話をさせていただくことが必要だと思います。 　教育が１０年、２０年のサイクルでグルグル変わってしまうということは良くないことだと思いますが、時代を見ながら進めていかなければならないこともあると思います。 　今から２０年以上前、興陽高校が佐波農業高校から変わる際に都市工学科を作るという話がありました。農業高校が前身ですので、普通なら農業土木科を作るのが当たり前だと思いましたが、当時は一般の土木が技術者難であり、前橋工業、桐生工業などの実業高校が定員を少し圧縮していました。そのような中で、興陽高校は都市工学科にしたいということで、地元の皆さんの運動もあって、スタートしたのですが、１０数年が経って、今度は地元で需要が無くなると、受験生がいなくなり、これを存続させること難しくなる。時代の変化に応じて、高校も大きく変化していかなければならないということで、こういった様々な社会の動きと連動しすぎると大変ですし、連動しなければこれはまた、生徒が集まらないということに繋がるでしょうし、教育というのは、変えるときには慎重に変えていかなければいけないと改めて思うところであります。しかし、これからの２０年、３０年はある程度中長期の視点で、高校の在り方を考えていかなければいけないと思います。 **（教育長）** 　ありがとうございました。最後に稲葉委員さんよろしくお願いします。 **（稲葉委員）** 　先ほど市長のお話の中で伊勢崎市から出て行ってしまうことが残念だというお話がありました。具体的な校名は出しませんけど、やはり、前橋市内の進学校であるとか、本庄市内の進学校であるとか、工業関係を目指すのなら高崎市内のあの学校とか、そうした特定の学校や学科に対する良いイメージはあるように思います。私が中学校の先生であったとしたら、勉強して頑張ってそういうところに行くという子どもは褒めると思いますし、そういう積極的な、流出というのかわかりませんけど、志があって市外に出る子に対しては、温かく支援することが良いと思います。また一方で、市域には一通りの種類の高校があると思いますが、そこが選ばれない、そこに行きたくなくて他のところに行くということであれば問題だと私も思います。 　本庄市内の私学に進んだ生徒の話を聞いてみると、自宅近くまでバスで迎えに来てくれて、放課後は進学予備校の授業を衛星放送で受講するような環境があって、その面倒見の良さから高校を選択したと言っていました。かつては学費の面で優位だった公立高校は、私学授業料が無償化されたことで、こうした私立高校と同じ土俵で比較検討されるようになっています。となると、公立高校の役割を今一度考え直す必要があります。どうすれば地元高校、公立高校に魅力を感じてもらえるのか。高校はある意味、学力によって階層化されているイメージがあります。それを打開するのは、先ほど野口委員がおっしゃったような、１つの学校の中に特進もあればスポーツ特進もあり、日本語支援もあるという学校。いろいろな生徒がいて、言ってみれば義務教育の延長にあるような、地元の中学生がそこに行くことが当たり前というように思える学校を作っていくということも、一つの方法だと思います。ただし、様々な生徒がいるということは、授業のバリエーションも要求されるので、場合によれば先生の負担が増える可能性、学校運営のコストが増える可能性もあり、それをどう考えるかは議論が必要と思います。 　もう一方で、今の高校が学びたいことを教えてくれているのかというところで少し心配する点があります。例えば、子どもに「大人になったら何になりたい」と聞いたときに、パティシエになりたいとか、サッカー選手になりたいとか、あるいは声優になりたいなど、今風な職業がたくさん出てきているような気がします。そのような職業に就くためには、一体どの学校に行っ

	たらいいのかということに、今、我々は明確に答えを出せていないのではないかと思います。例えば、ＥＶの自動車整備士になりたいといったときに、工業高校の機械科を受けるのが良いのか、電気科を受ければ良いのか、あるいは自動車科がある高校に行くのか。そのような将来就きたい職業に対するプログラムが用意されていればベストですが、プログラムを用意することが難しければ、パスを示してあげたい。図書館の用語でパスファインダーというものがあります。こういうことを調べたいなら、このような本を読んでいけば良いよというリストをあらかじめ用意しておくというサービスなのですが、そういった進路のパス、小道を見つける手助けが高校にあってほしいなと思います。 　それと、グローバル人材の育成や日本語支援に関するお話がありましたが、その点に関しては２つ申し上げたいことがあります。一つは、日本語の学習に色々なサポートができる高校。これは伊勢崎市には特に必要だろうと思います。けれども、外国籍の方が教壇に立つということは、公立学校では非常に難しいことになっています。そうであれば、日本人の先生方に語学力を上げていただくしかないと思います。それに関しては２つ提案があります。一つは少なくとも共同教育学部で第２外国語、例えばポルトガル語、スペイン語、ベトナム語などを必修にしてもらうということです。もう一つは、外国語の検定も英語以外に様々あるようですが、採用試験のときにこうした検定の得点が一定の点数以上の人に対して加点するということです。さらに言うなら、共同教育学部には外国籍の入学者枠を作るくらいのことをやってもいいのではないかと思っています。 　二つ目の提案ですが、県立高校でＩＢ（インターナショナル・バカロレア）スクールを作ることはできないのかと思っています。ＩＢスクールは、現状、太田市内のぐんま国際アカデミーしかありません。ぐんま国際アカデミーは、色々な工夫をして設置されているわけですが、全国的にみると県立も少なくありません。多文化共生は群馬県の課題でもありますし、海外企業誘致なども考えると、県立でＩＢスクール持っていても良いと思います。そして、それを作るのであれば、伊勢崎市がふさわしいと思います。ニーズもシーズもあると思えます。 **（教育長）** 　ありがとうございました。特に外国籍の子どもたちをはじめ、様々なニーズにも応じる新たな学校の在り方など斬新なご提案をいただきました。市長、いかがでしょうか。 **（市長）** 　高校教育の場合、あまり変化をしない方がいいという部分が一つあると思いながらも、やはり社会の要請というか、時代に合わせた変化をしていかなければならないということを、改めて聞かせていただきました。 　先週からミズーリ州スプリングフィールド市の高校生１７名が、使節団として伊勢崎市に来ていて、今朝、帰国しました。歓迎会を行ったときに、引率の先生からアメリカの高校の話をしていただきました。また、ちょうど向かい側に座った高校生は、１年飛び級で進級している子で、ホームステイ先のホストファミリーの方に政治論理を挑んでいたそうです。そういう制度もアメリカでは当たり前に入っています。また、スプリングフィールド市なのかはわかりませんが、かなり荒れてしまった高校があって、周りに住んでいる方たちが、その高校があることを嫌って外に出てしまうような状況があったそうです。しかし、その高校をＩＢ高校にして、将来に向けて、世界に羽ばたくような生徒を集めてきたら、住民が戻ってきたという話を聞きました。やはり地域にある地元の高校の在り方が町を変えていくということにも繋がっているのだと思います。在り方を変えるためには、本当に慎重な議論をしなければいけないと思いますけれど、変えるときには、かなり大胆に変

	えるということも将来を見据えたときに必要なのではないかと思います。このようなことを県に対して、話していかなければならないと思いますが、その前段で、市民の皆さんがどのように高校教育を考えているのか、それに対する義務教育をどのようにしていくのかということを合わせて考えていかなければいけないと思っています。 **（教育長）** 貴重なご意見をいただきまして、ありがとうございました。 以上で、意見交換を終わります。この後の進行は市長にお願いします。 **（市長）** 貴重なご意見をいただき、大変ありがとうございました。最後に教育長から全体として一言いただければと思います。 **（教育長）** やはり高校そして大学、いわゆる社会の出口に近いところが変化をすることに伴って義務教育も変わっていかなければいけない。義務教育とは、学年で言えば６歳から１５歳までの間で、人として共通に学ばなくてはいけないこともある。そこから子どもたちのそれぞれの個性や能力が分化して、自分らしく生きられる道を自分で選べるようにしていくというのが教育の大きな流れかと思います。 そういう意味で、まずは、今、子どもたちがどう育っているのかという義務教育の部分と、そして社会がどのような人を望んでいるのか、どのような社会が子どもたちを待っているのか、その間の高校をどうするかという議論というのは、これからもすごく大事だと思います。広く、多くの市民の皆さんからのご理解をいただきながら、学校教育の改革、改善というものを一つ一つ進めていかなければならないと思いますし、今日、４人の皆さんからこれだけの色々な提案があるだと思いますと、多くのご意見を伺いながら、市長がおっしゃるとおり、慎重に事を進めながら、しかし、大きく変化する社会に向かって大胆な改革も必要であるということの認識を新たにしたところでございます。どうもありがとうございました **（市長）** それでは、協議事項を終わりとさせていただきます。 **６　その他** 特になし。 **７　閉会［市長戦略部長］** 活発なご協議ありがとうございました。 以上をもちまして、令和８年度第１回伊勢崎市総合教育会議を閉会させていただきます。本日は、大変お疲れ様でした。